

ご入り用の方は

宇和島信用金庫 総務部までご連絡ください

TEL：0895-23-7000（代表）

伊達宗利の娘
豊姫物語

だてむねとしむすめ
とよひめものがたり

一家と故郷つなぐ「あんず」の縁

ふるさと
ふるさと
ふるさと
ふるさと
えん



宇和島信用金庫

—この街が好き、この街と未来を拓く—

「ご先祖さま、今日もおだやかな朝をむかえられました。

いつも見守ってくださいり、ありがとうございます。

江戸のみんなも、宇和島のみんなも、

今日一日、平和に過ごせますように」

ここは江戸にある宇和島藩^{はん}伊達家のおやしきです。

宇和島藩二代藩主伊達宗利は、仏間で、夫人の稻姫、娘の豊姫とともに、先祖に向かつて手を合わせました。大きな仏壇には、宗利の祖父の伊達政宗、父の伊達秀宗の位牌もあります。

毎朝、宇和島が豊かに繁栄し、領民が平和に暮らせるようにと、家族そろって仏間でお祈りをしました。



大名家では家族そろって食事をすることはできません。殿様、夫人、子どもたちは、それぞれの部屋で食事をします。

宗利は、自分の部屋で朝食を終えると、仕事をします。宇和島からの手紙を読んだり、家臣からの報告を聞いたり、大事な判断をしたりと、しなければならないことがたくさんあります。仕事を終えると、午後は勉強やしゅみの時間にあてることがあります。



ある日の午後、宗利は稻姫の部屋をたずねました。

稻姫はいつものように、「源氏物語」を小さな本に書き写していました。小さな筆で、手のひらに乗るほど小さな本に米つぶよりも小さな字で、長い物語を書き写すのです。稻姫は集中するあまり、目が少し赤くなっていました。

※『藩』一万石以上の大名が治めた領地と支配機構のこと。

※『源氏物語』平安時代中期、紫式部によって書かれた、初めて女性が書いた長編小説。

「あまり根をつめではならない。ほどほどにしなさい」

宗利はやさしく稻姫をいたわりました。

「お気づかいありがとうございます。でも、これは宗實さまとのお約束ですか……」

宗實さまというのは、ずいぶん前になくなつた宗利の兄です。宗利には兄が一人いました。

長男が宗實、次男は宗時といい、宗利は三男でした。宗實は体が弱く、部屋に閉じこもつて『源氏物語』を書き写すの

を日課にしていました。

宗實はなくなる前、宗利をよんで、

「わたしはもう長く生きられないと思う。『源氏物語』の写本がとちゅうで終わるのが心のこりだ。宗時は領地の宇和島を治めるためにいつもいそがしくしている。

宗利に続きを書いてほしい」と言いました。

「きっとお約束します」
宗利は答えましたが、このときまだ九歳でした。宗利は書道にはげみましたが、小さな字はどうしてもうまく書けません。宗利はときどき兄との約束を思い出し、心を痛めしていました。

宗利の妻になつた稻姫は、越後高田藩松平家に生まれ、教養があり、小さな字もきれいに書けました。宗利はそんな稻姫を見込んで、写本を続けるようたのんだのです。

兄の願いをかなえてくれた稻姫に、宗利はいつも感謝をしていました。

「ところで、豊姫の婚礼のことなのだが……」

宗利のその言葉に、稻姫は静かに筆をとめました。
「こし入れ道具をそろえるのは、やはり無理のようだ。昨日、宇和島から手紙が届いたが、大洪水のせいで今年も田畠は不作になるらしい。親としてできることはしてやりたいとは思うのだが、お金のやりくりはむづかしいと思う」
このころ、どの大名家もお金には困っていました。特に作物が取れない年は、何かと不自由な思いをしました。

※「越後高田藩松平家」「越後高田藩の藩主松平光長の娘」
※「越後高田藩の藩主松平光長の娘」
※「こし入れ」嫁入り・嫁のこと

※『源氏物語絵巻』イメージ



「心配なさらいでください。」

稻姫は答えました。なんと娘の豊姫の婚礼に備えて、けしょう道具など、身の回りの品を少しずつ用意してきたというのです。

「そのほかのお道具や箒、鼓などはわたしがこし入れのときに持ってきた品々を豊姫に持たせましょう。お衣装もわたしのものを仕立て直せばよいと思います」

宗利は、稻姫の言葉に安心しました。

「ありがとうございます。それは助かる。では、豊姫に話をしよう」

稻姫は宗利の気持ちを受けとめ、奥女中に命じて豊姫を呼びました。

豊姫はまだ十三歳ですが、結婚をひかえたせいか、日に日に大人びてきたように宗利には見えました。

両親からよめ入りする自分への思いを聞いた豊姫は、胸をいっぱいにして、やがてほほえんで言いました。

さまといつしょにいるような気持ちになれるでしょう」
豊姫のけなげな言葉に、宗利も稻姫も心をうたれました。

江戸にある伊達家の^{おやしき}の庭には、宇和島から運んで育てたあんずの木が何本もありました。春にはうす桃色の花を咲かせ、梅雨になるとまんまるの実がなります。あんずの実は甘くておいしく、種はせきどめの薬になります。

豊姫は幼いころから、母の稻姫、父の宗利といつしょに、じゅくしたあんずの果实を取り、親子で食べるのが毎年の習わしなっていました。そんなとき、父の宗利はきまつて領地宇和島の話をしました。

「父上さま、ありがとうございます。母上さまのお道具をいただけるのは、夢のことです。真田家にとつぎましたら、大切に使わせていただきます」

稻姫は思わずなみだが出そうになりました。十三年間、大切に育ててきた娘ですが、よめ入りすれば、めったに会うことはできなくなるのです。

ところが、豊姫は意外なことを言いました。

「ほんとうは、わたしは何もなくてもよいのです。ただ、『あんず』の種を一つ持つていいきたいのです」

豊姫は、おどろく父と母の顔を交互に見ながら、はつきりした声で言いました。「真田さまのおやしきのお庭に種を植えて、あんずを育てたいのです。およめ入りすれば、わたしはもう伊達家の人はありません。二度とお目にかかることはないと覺悟しなければなりません。でも、はなれいても、あんずの木があれば、父上さま母上



宇和島には海があり、山がある。人も地
もあたたかで、いつも笑顔にあふれている。
海や島々をのぞむお城は、新しく建て
かえられて、お城下のどこからでも白く
て美しいお城の天守が見える……。

そんな宗利の話を聞くのも、豊姫は楽

しみでした。



豊姫がよめ入りする松代藩真田家は、宇和島藩伊達家と同じ十万石の大名家です。真田家の家紋は六文銭という家紋で、戦場で少しも死をおそれない、という意味をあらわしています。

真田家といえば、真田幸村が有名です。幸村には信之という兄がいましたが、「関ヶ原の戦い」では、兄弟で敵味方に分かれて戦いました。合戦では兄が味方した徳川家康が勝ち、負けた幸村は紀州（和歌山県）の九度山というところでひつそりと生活することになりました。

十四年後、徳川家康が豊臣家をほろぼそうとする「大坂の陣」という大きな戦が始まりました。幸村は豊臣家に味方したので、またしても兄弟は敵と味方に分かれました。



伊達政宗の軍は真田幸村の軍とはげしく戦いました。政宗は幸村の勇かんな戦いぶりに感心しました。豊臣の敗戦が確実になり、死を覚悟した幸村は、幼い子どもたちをひそかに政宗の家臣のもとに行かせ、育ててほしいとのみました。政宗と幸村は敵同士でありながら、お互いに尊敬し合っていたのです。伊達家と真田家には、このような縁もあつたのでした。

「関ヶ原の戦い」戦国時代後期 安土桃山時代の一六〇〇年に美濃の関ヶ原で、徳川家康が大領となる東軍と、石田三成を中心とする反徳川勢力の西軍による、天下分け目の合戦。政宗の伊達家は、徳川側の東軍に参戦した。
「大坂の陣」戦国時代最後の大合戦。大坂の陣は、徳川家康が率いる江戸幕府と豐臣家との間で行われた大戦闘。一六一四年の大坂冬の陣と一六一五年の大坂夏の陣からなる。



豊姫の結婚相手は真田家三代藩主の
真田幸道です。徳川家のもとで戦いの世が
終わり、世の中は平和になっていました。

幸道は強い武将だった先祖をほこりに思い、

幼いころから武芸にはげんできました。

真田家から豊姫を幸道の妻にむかえたい
という話があつたとき、豊姫はまだ十二歳
でしたので、およめに行くには早すぎる、
と宗利は思いました。ですが、幸道も十五
歳と若いながらも、しつかりした殿様だと
いう評判でしたので、宗利には結婚に反対
する理由がありませんでした。

いよいよ、婚礼の日が近づいてきました。
豊姫は、両親のもとをはなれて暮らすこと
を不安に思いながらも、日に日に、真田家
にとつぐ覚悟ができてきました。

真田家のおやしきは江戸城に近い桜田と
いうところにありました。伊達家は江戸
城からはなれた麻布におやしきがあります。
道具送りといつて、およめ入りの前に、
豊姫の身の回りの品が桜田の真田やしきに
送られます。荷物を運ぶ行列が麻布のお
やしきを出発しました。行列を見送りな
がら、稻姫は豊姫の婚礼が近づいたことを
うれしくもさびしく思いました。

婚礼の日、きれいにおけしょうをし、
美しく着かざつた豊姫は、伊達家のみな
みなに見守られながら、ごうかな駕籠
に乗って、おやしきを出て行きました。
長い行列を見送る稻姫の目にはなみだが
ありました。



豊姫は十三歳、そして幸道は十六歳。二人はまるでおひな様のようないいしい夫婦でした。初めて幸道と会った豊姫は、少しひつくりしました。幸道は背が高く、からだつきもがっしりしていて、いかにも武士らしいりりしい姿で、ちょっとどこわそうな顔をしていました。

幸道は毎日、武芸のけいこや学問にはげんでいました。夫婦になつてもあまり一人でいる時間はありません。いつしょの時も、幸道はほとんど何もしゃべらず、おこつたような顔をしていました。自分はきらわれているのだろうかと、豊姫は不安になりました。



ある日、あんずのようすを見に行くと、幸道がていねいに水やりをしていました。豊姫はうれしくなり、幸道はきっとやさしい人だと思いました。

後になつてわかつたのですが、まだ若い幸道は、真田家の殿様としてふさわしくありたいと願い、いつも背すじをのばし、きびしい表情をしていたのです。

豊姫は父と母に手紙を書きました。夫の幸道はやさしく、真田家のみんなにもよくしてもらいたいながら幸せに暮らしていること、あんずの種を植えたことなど、書きたいことはたくさんありました。

やがて土から小さな芽が出ました。あんずは、少したよりない、ひよろつとした木になりました。育つかどうか豊姫は心配でしたが、幸道は葉っぱについた害虫なども取ってくれました。

豊姫は幸道からお庭の散歩にさそわれました。広いお庭を歩くうち、豊姫は口あたりのよいところを見つけ、ここにあんずの種を植えようと思いました。幸道に相談すると、賛成してくれ、土を掘るのを手伝ってくれました。

「無事に芽が出来ますように」

豊姫は両手を合わせていのりました。幸道はただいまつて見ていてだけでした。

あんずの木はどんどんのびて、太い幹で地にしつかり根ざし、いつか幸道の背よりも高くなりました。

そして、手が届かないほど高くなり、かわいい花が咲き、たくさん実がなるようになりました。豊姫は幸道と二人であんずの実を食べ、その種を植えて、あんずの木をふやしました。

この時代、徳川幕府が決めた参勤交代というきまりがあり、殿様は一年ごとに領地と江戸で暮らします。夫人と子どもたちは夫の領地に行くことはできず、ずっと江戸に住みました。

幸道は領地の松代に帰るとき、あんずの種を持ち帰りました。家臣たちも分けてもらつて庭に植えました。

やがて、あんずが松代藩の暮らしを支える大事な産業として進められるようになり、松代にはあんずの木がどんどんふえていました。春になると、あんずの花で満開になり、お城下はうす桃色にかすんで見えるほどになりました。

「松代は、豊姫のおかげで、すっかりあんずの里になった」

幸道はうれしそうに豊姫にいました。

豊姫は、いつか松代のあんずを見たいと思いましたが、大名家の夫人は江戸から出ることはできません。幸道の語る美しいあんずの里を、豊姫はただ想像するばかりでした。



幸道は七十歳でなくなりました。

豊姫はそのまま江戸で暮らすこともできましたが、残りの人生を松代で送ることにしました。あんずの里を見たいと思つたのです。

「なんと美しいところ・・・」

初めておとずれた松代は、光かがやく
大きな千曲川が里を流れ、ならかな山々
に囲まれた、自然豊かな地でした。豊姫
は美しい里山の風景に息をのみました。

そして、幸道の言つたとおり、あんず
の木が見わたすかぎり一面に広がっていました。

「父上さま、母上さま、ご覧になれますか？」

これが真田のあんずの里ですよ」

豊姫は今はこの世にいない宗利と稻姫に、

しずかに語りかけました。



世の中のできごと

初代 秀宗

1590年 豊臣秀吉、小田原征伐、天下統一

1591年 秀吉、大國と呼ばれるようになる

1592年 秀吉、死去

1598年 関ヶ原の合戦

1603年 德川家康が江戸幕府を開く

1605年 德川秀忠が二代目将軍となる

1612年 禁教令

1614年 大坂冬の陣

1615年 大坂夏の陣、豊臣氏滅亡

1616年 家康、死去

1617年 繩政令

1618年 参勤交代制始まる

1623年 德川家光、第三代将軍となる

1633年 領國令

1635年 伊達政宗、68歳で死去

1637年 島原の乱

1642年 寛永の大飢饉

1651年 第四代将軍となる

1652年 德川家綱が第五代將軍となる

1653年 宗時、38歳で死去

1654年 宗貞、32歳で死去

1655年 宗利、秀宗、園庭

1656年 宗利、67歳で死去

1657年 宗利、秀宗、園庭

1658年 宗利、秀宗、園庭

1659年 宗利、秀宗、園庭

1660年 宗利、秀宗、園庭

1661年 宗利、秀宗、園庭

1662年 宗利、秀宗、園庭

1663年 宗利、秀宗、園庭

1664年 宗利、秀宗、園庭

1665年 宗利、秀宗、園庭

1666年 宗利、秀宗、園庭

1667年 宗利、秀宗、園庭

1668年 宗利、秀宗、園庭



宗利が改修した宇和島城の天守閣
撮影：萩原 智佳

1732年	享保の大飢饉
1716年	第七代将軍となる
1713年	徳川吉宗が
1709年	第六代将軍となる
1707年	徳川家宣が
1704年	(富士山噴火)
1702年	松尾芭蕉「奥の細道」刊
1685年	第五代将軍となる
1680年	徳川綱吉が
1671年	伊達家のお家騒動
1651年	伊達騒動
1642年	島原の乱
1637年	寛永の大飢饉
1633年	第三代将軍となる
1623年	徳川家光
1614年	大坂冬の陣
1612年	禁教令
1610年	大坂夏の陣、豊臣氏滅亡
1609年	秀吉、死去
1605年	徳川秀忠が
1603年	徳川家康が江戸幕府を開く
1600年	関ヶ原の合戦
1598年	秀吉、死去
1590年	豊臣秀吉、小田原征伐、天下統一

二代 宗利（・豊利）

三代 宗質



宇和島藩初代藩主秀宗の三男、二代藩主伊達宗利

一六三五年、秀宗の三男として生まれた。母は側室浅井於小奈。於小奈は淀殿（浅井茶々）の姪とされる。宗時の死で二代藩主になることが確定したが、秀宗の五男宗純が、秀宗が書いたとされる「三万石分地状」を持ち出、三万石相続を主張した。秀宗は重病で、宗利は秀宗の真意を確認できず、家臣たちは宗利派と宗純派に分かれ、争った。仙台藩の伊達兵部宗勝（伊達政宗の十男）が介入し、七万石の大名となつた。

宗利の息子は皆若くして亡くなり、秀宗が成敗した家老山家清兵衛の崇りとされた。これを心配した伊達源村が、清兵衛の慰靈について宗利に書き送つた手紙が残つている。宗利は、災害や気候不順による苦しい財政のなか、宇和島城を大改修の確立、検地、農業改革、機約政策など、三十六年間に及ぶ統治は、諸制度の確立で七十二年の生涯を終えた。宗利は、領内巡視の際も農民の平伏を禁じ、民を慈しんだという。祖父政宗、父秀宗に似て和歌に巧みで、「白詠懸草集」がある。

宗利の妻、豊姫の母
稻姫

（公財）宇和島伊達文化保存会所蔵



宗利所用の甲冑

錆色地鋼鉄具足

江戸時代の前期につくられた、宗利の所用具足。兜の吹き返しなどに伊達家の家紋の竹に雀紋が付いている。胴は錆色地の瑠璃襷脛と総移されるものと考えられる。瑠璃襷脛は江戸時代の考案で、胸の部分を取り外し、腰中物を出し入れするためともいわれている。兜は頭形型（錆色地）の重厚なつくり。

「源氏物語」豆本

黒漆塗絵の箱に納められた『源氏物語』豆本は紙面約四センチ角、文字はルーベでもうやく判読できる。およそ百万字が丁寧に書かれ、気の遠くなるような作業を想像させる。用いられた筆の毛は、かつて琵琶湖周辺に生息した鼠の鬚といふ。大名家の子女の高度な能力を示す一例である。宗利の兄宗實が書き始めたものを、宗實の没後、稻姫があとを引き継ぎ、完成させたものではないかといわれている。

越後高田藩主松平光長の娘。母は正室の土佐姫（毛利秀就の娘）。一六四〇年、駿町屋敷で生まれる。

松平光長は菊池寛の短篇『南風卿行状記』で有名な年、宗利と結婚。越後膳勲で実家は廃絶したが、宗利の妻として伊達家を支えた。

大名家夫人として優れていたことは「源氏物語」豆本や「大通院殿御自筆」から推察できる。一七〇九年、江戸にて六十八歳で没。



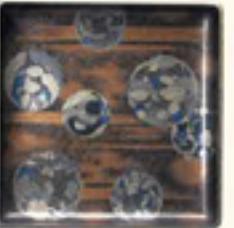
（公財）宇和島伊達文化保存会所蔵



豊姫の墓とお雪屋

一六六〇年、宗利の長女として江戸屋敷に生まれ、一六七三年、真田幸道に嫁ぐ。豊姫により松代にあんずがもたらされたともいわれ、松代藩はあんずを援助し、嘉永年間には杏（せき止めなど）の専売を始めた。

一七三三年、七十三歳で没。夫の幸道が開基した黄檗宗象山恵明禅寺（長野市松代町）に豊姫のお雪屋と墓がある。



広蓋「村梨地四季花の丸時絵・村梨地桜折枝に短衝萬絵」



広蓋は衣服を入れる整理箱で、村梨地に様々な手法によって荷詰が施されている。



黒塗地に根芽を全体に記し、実家の伊達家の家紋「行に雀」を散らしている。

真田宝物館 所蔵

豊姫の御道具

松代藩三代藩主真田幸道に豊姫が奥入れした際、伊達家より持参し、着物など衣類を置くのに使用したとされる。

秀宗の長男 伊達宗實

一六一二年、江戸に生まれた。母は井伊直政の娘・龜姫。病弱で政務に携わらず、その生涯はほとんど知られていない。『源氏物語』豆本を遺している。宗實の死後、二代藩主宗利夫人の粗姫によって書き継がれた。一六四四年、二十一歳で病没。

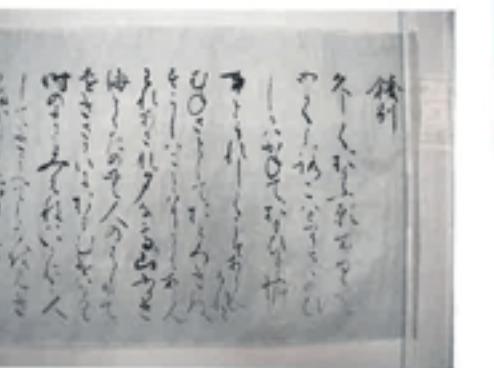
秀宗の次男 伊達宗時

一六一五年、江戸に生まれた。母は龜姫。島原の乱の頃、江戸で発病した伊達秀宗は、宗時を宇和島に帰国させ、政務にあたらせた。検地、藩士の給与の見直し、農・漁業の改革など、宇和島藩の基礎固めに尽力。事实上、二代藩主としての文獻もある。一六四三年、三十八歳で没。

秀宗の四男 桑折宗臣

大通院とは粗姫のこと。次女三保姫の夫となつた三代藩主宗實が宇和島に帰った際に粗姫が送つた手紙とされる。嫁である宗實の立派な容姿を誇りに思うことも文面にしたためられ、姑としての粗姫の気持ちもうかがえる。遙くにいる宗實を思いやり詠んだ和歌も三首あり、粗姫は文才豊かであったと考えられる。この手紙とともに、葉五包が同様され、粗姫の体調を気遣う粗姫の細やかな気配りを感じ取れる。

大通院殿御自筆御錢別御自詠



(公財)宇和島伊達文化保存会所蔵

真田家の家紋 六文銭 三保姫と宗實

宗利の次女三保姫（豊姫の妹）は一六七六年、江戸屋敷で生まれ、一六九七年、二十一歳で病没。三保姫の娘養子として、仙台三代藩主伊達綱宗の三男宗實が迎えられ、宇和島藩三代藩主となつた。（宗實一六六五—一七一一年）宗利は七万石になつた宇和島藩を十万石に戻したいと考え、宗實がそれを実行した。宗實は新田開発を奨励し、新たな漁村を整備し、一六九六年、幕府から七万石を十万石に戻すこと（元禄の高査し）が認められた。しかし、十万石になつたことで幕府から命じられる寺社の再建や土木工事などを増え、藩財政はさらに悪化した。

宗實は甲冑を身につけ、漁獲を年貢にあてた。漁村に山地の開墾によると、百姓自ら認めたが、漁村にはむずかな急傾斜地しかなく、これが段々燃え始まりといわれる。



(公財)宇和島伊達文化保存会所蔵



真田 実道

豊姫が嫁いだ、
松代藩真田家の三代藩主
松姫（本多忠勝の娘）の子の信政
であつたが、信政の死により五
歳で三代藩主となる。幼い頃から
武芸に励み、「松城」を「松代」と
城の築造工事、朝鮮通信使のも
てなしなども勤めた。一六五七年
に生まれ、一七一七年、江戸にて
七十歳で没。



真田家の家紋の入った
「無縫地の旗」・真田玉物館所蔵

真田家二代藩主は、真田信之と小
松姫（本多忠勝の娘）の子の信政
であつたが、信政の死により五
歳で三代藩主となる。幼い頃から
武芸に励み、「松城」を「松代」と
城の築造工事、朝鮮通信使のも
てなしなども勤めた。一六五七年
に生まれ、一七一七年、江戸にて
七十歳で没。

真田 実道

松代藩最後の藩主
真田幸民



明治新政府の要人であった実父宗城は、若き日の幸民の力となり、その後も真田家と実家宇和島伊達家の関係は密であったようである。

(一八五〇—一九〇三年)
宇和島藩八代藩主・伊達宗城の長男。幼名は保麿で名付け親は祖父にあたる七代藩主・宗紀。宇和島に生まれ宇和島で育つ。松代藩九代藩主・真田幸教への養子入りが決まったことから江戸へ出て、一八六六年、真田家の家督を相続。名を幸民と改め、松代藩十代藩主就任と同時に幕府から京都警衛を命じられ、上京。戊辰戦争勃発時は江戸におり、徳川方に取り込まれそうになるが、朝廷をうけ、藩兵を新政府軍として飯山・越後・会津などへ派遣。その戦功により、幸民は明治政府から賞典禄三万石を賜った。

一九〇三年に五十四歳で死去。死去に際しては、明治天皇から、從二位への褒美を贈られるあんずの木が植えられている。

宇和島市立伊達博物館は旧御殿（通称：御濱御殿）の一角の南庭園の地にあり、門を入ってすぐにその名残の庭園がある。そこには「里帰りの杏」と呼ばれるあんずの木が植えられている。

「里帰りの杏」は、宗利の長女豊姫が、信州松代の真田家三代幸道へ與入れしたことになんでいる。その縁で宇和島市は、一九七三年当時の更埴市（現千曲市）と姉妹都市の盟約を結んだ。ちなみに、宇和島伊達家から真田家へは八代宗城の長男、幸民も養子に入り、両家の縁は深い。姉妹都市となつた記念に、あんずで有名な更埴市（現千曲市）から宇和

里帰りの杏



その他の古の木は、宇和島市役所、宇和島市駅前広場、個人家の庭などでも見られ、校庭の木から杏シャムをつくる学校もある。



真田家十二代当主・幸治氏から一九六六年に譲られた武具・調度品・書画、文書などの大名道具を収蔵・展示する博物館。松代藩真田家の歴史と、大名道具を紹介する常設展示室、テーマを定めた特別企画展示室からなる。
(長野県長野市松代町)



武田信玄と上杉謙信が信濃の霸権を競った川中島合戦で、武田側の拠点として築城されたといわれている。千曲川の流れを外堀とする天然の要害で、当時は「海津城」と呼ばれた。江戸時代、真田氏が松代藩主となり、松代城を中心にして真田十万石の城下町が発展。明治の廢城にともない建物が壊され長い間石垣を残すのみであった。一九八一年、新御殿（真田邸）とともに市庁舎前、津島町の南庭園にも「里帰りの杏」が友好の印として贈られた。現在、千曲市の市花はあんずである。春になると千曲市の広域があんずの花の香りで満たされる。現在の宇和島市の市花はみかんの花であるが、市町村合併前の旧宇和島市はあんずの花を市花に制定していた時代がある。

今や千曲市では、あんずは特産品として、お土産や観光名物ともなつている。四月には「あんずまつり」が開催され、市外県外から多くの観光客で賑わう。

松代城跡

武田信玄と上杉謙信が信濃の霸権を競った川中島合戦で、武田側の拠点として築城されたといわれている。千曲川の流れを外堀とする天然の要害で、当時は「海津城」と呼ばれた。江戸時代、真田氏が松代藩主となり、松代城を中心にして真田十万石の城下町が発展。明治の廢城にともない建物が壊され長い間石垣を残すのみであった。一九八一年、新御殿（真田邸）とともに市庁舎前、津島町の南庭園にも「里帰りの杏」が友好の印として贈られた。現在、千曲市の市花はあんずである。春になると千曲市の広域があんずの花の香りで満たされる。現在の宇和島市の市花はみかんの花であるが、市町村合併前の旧宇和島市はあんずの花を市花に制定していた時代がある。

今や千曲市では、あんずは特産品として、お土産や観光名物ともなつている。四月には「あんずまつり」が開催され、市外県外から多くの観光客で賑わう。



あんずの里

千曲市キャラクター
あん姫

春運い信州にいち早く咲く、「一曰十万本」とうたわれる日本一のあんずの里。豊姫が松代藩主の真田幸道に美入れする際、宇和島を懐かしむため「あんず」の種を持たせたとい伝えられている。長い時を経た今日でも、故郷を想う豊姫の気持ちが、里山一面を薄紅色でいつぱいにす。春は花、初夏には実が楽しめる。



日本一大河、千曲川。信州の山々に囲まれた千曲市内を穏やかに流れ、生活の源となっている。長野県では千曲川、新潟県では信濃川と呼ばれています。全長三六七キロメートルのうち、千曲川は一一四キロメートル。河川法上で千曲川を含めた信濃川本流を「信濃川」と規定しているため、日本で一番長い川は信濃川となる。

千曲川



©千曲市

姨捨



©千曲市

おばを山に捨てた男性が、名月を見て後悔に耐えられずに連れ帰ったという逸話があり、その後老人を大切にしたと伝えられている。姨捨は名月の里と呼ばれ、俳句や和歌も多く残っている。ならかな棚田と善光寺平を見下ろし、幻想的な景色が人々を魅了し続けている。姨捨の棚田は、国の重要文化的景観に選定されている。

姉妹都市児童交流事業



宇和島市と千曲市では、姉妹都市交流の一環で、旧更埴市時代の一九九一年から児童交流事業を続けています。なお、今年で二十六回目になる（千曲市になつてからは二〇〇三年から十五回目）。約二十名の小学校六年生を隔年で両市相互に受け入れる。千曲市の子どもたちが宇和島を訪れる際、日高島や戸島で海水浴やスイカ割り、海の幸など、夏の宇和島を体験する。一方、宇和島市の子どもたちが千曲市を訪れる際、スキー体験や雪遊び、山の幸など、冬の千曲を体験する。二泊三日間の自然の旅とホームステイで、子どもたちの成長とともに、姉妹都市同士の友情の絆を育んでいます。

宇和島信用金庫 IDEA



宇和島信用金庫 IDEA は、私たちの目指すべき方向やるべき姿を定めた、企業理念体系です。

企業理念は創業の精神を尊重した「愛郷心と人生美の創生」とし、目標とすべき5つの方向軸を明確にしています。

IDEA の五角形の形は、宇和島城を中心に五角形に形成され繁栄した宇和島の街と重ね合わせ、地域に密着した金融機関として、末永く、地域から愛され必要とされる信用金庫であり続けられるよう願いを込めています。

繪本「伊達宗利の娘 豊姫物語－家と故郷つなぐ「あんず」の縁－」は、宇和島信用金庫 IDEA のもと、宇和島信用金庫 創立95周年を記念して制作されました。未来を担う子どもたちに、宇和島のすばらしい歴史・文化を知ってほしい、また姉妹都市である千曲市を知ってほしい、そして長く語り継がれていくものを残していきたいとの想いです。子どもも大人も一緒に楽しみいただけます。

うわしん NEXT100 繪本制作プロジェクト実行委員会
2017年6月15日「信用金庫の日」

企画制作	宇神 実紀
繪本制作	はらぐちあつこ
構成執筆	宇神 実紀
監修協力	本田耕一（宇和島市立伊達博物館前館長） 平井倫子（宇和島市立明倫小学校前校長）
特別協力	公益財團法人宇和島伊達文化保存会 宇和島市立伊達博物館
参考文献	【宇和島伊達家伝来品図録】 宇神幸男「シリーズ蓬物語字和島藻」 『お殿様、お姫様の江戸幕』【真田家の名宝】 野崎敏子（文）、森嶽郎（版画）『創作民話 豊姫物語』
総合企画	うわしん NEXT100 繪本制作プロジェクト実行委員会 委員長 村尾明弘（宇和島信用金庫理事長）
企画制作	株式会社コトヴィア
後援	荻原実紀、田中裕子、リチャード・智恵子、荒木敦子、小路悠佳 編集デザイン協力 八十島博明、石神奈津子
協力	長野信用金庫 上田信用金庫 千曲市 千曲市教育委員会